



# ジュエルワスプ



bloodmaria

都会と呼べるほど新しいものは並ばず、田舎と呼ぶほど時間の淀んでいない、そんな町の郊外の話。

もうじき山道へ差し掛かろうかとする場所にバス停があった。ツタに纏わりつかれたバス標識の背後には、土管を横にしたような排水口が藪から飛び出している。それはいつも山や近場の建造物より流れてきた水を勢いよく噴出していた。時折、泥の塊りが原因なのか、排水口から落下した流水が大きな音をたてて跳ね上がる。しかし堆積するものはない。再び流水は一定の強さと速度を取り戻すので、それを気に留める者はほとんどいなかった。

このバス停の周囲にいと頭痛や目眩を起こすという変な噂が、ちらほらと近隣に住んでいる人から市役所へ寄せられていた。付近は薬物を使用している工場や特殊な建造物が一切見当たらない場所である。一応、例の排水口も検査されたが水質はいたって普通の泥水だった。

数列の古びたアパートと数軒の農家、老人ホーム、高速道路、廃トンネル。バス停を中心にと半径三キロ圏内にはその程度ものしかない。あとは……バス停から少し歩いた脇道に放棄されたベビーカーぐらいだ。捨てられているにしては汚れが目立たない代物で、外装の白とピンクの模様がやけに鮮やかだった。

たまにバス停から歩いて来た者がベビーカーに興味を示す。頭を抑えるようにしてフラリフラリとやって来る。ずっとベビーカーの前に立ち尽くしていたかと思えば、今度は身を乗り出してベビーカーの中へ上半身を押し込めていく。愉快そうな声が聞こえるときもあった。やがて、彼らはベビーカーを押して山道へ消えていくのである。それは近くの山で伐採業を営む者や通りがかりの運転手によって幾度か目撃されていた。

持って行かれたベビーカーは翌日、またもとの位置に戻されている。さすがに怪しんだ近隣の者が暇がてらに見張っていると、ベビーカーは近くに住む小学生によって戻されていることがわかった。

こうして、みんなが恐ろしいあかずの間を知ることになったのである。

小学生の証言から警察は廃トンネルを調査した。廃トンネルはバス停から山へ約十五分登った先にある。トンネルの内部自体には何も見当たらなかったが、側面の大きな排水道を降りたところに彼らは転がっていた。

発見された遺体は"およそ"七人。全員、自殺と判断された。この時代、集団自殺なら珍しくはない。だが、ここで発生した集団自殺は異常なものだった。

彼らには一人として生前の接点がなく、一人として同じ時期に死んでいないのである。各々ここへ辿り着き、各々ここで死んでいったのだ。

わかりやすく状況を説明すると、偶然に死体の山を見つけて、そこらじゅうに転がる見ず知らずの死体の中で自身も死を選んだということだ。

旅行前にペットを知人へ預けた帰路の途中で、準備万端でコンパへ向かう途中で、学校を終えてカラオケへ行く途中で……彼らは死ぬことにしたらしい。

死んだ理由で納得のいきそうな者は、最初に自殺した女性だけだった。あのバス停から降りてすぐ、彼女は自分の赤ん坊を交通事故でなくしていたのである。その事故で、人生の全てを喪失したように彼女は破壊し尽くされてしまった。事故後まもなく、彼女は行方不明となっていた。

小学生は学校の帰り、いつも廃トンネルの前に立っていたという。ベビーカーを押してやって来る人を待つのが、その遊びにおける小学生の役柄だった。

彼らはトンネルに着くと"お馬さんごっこ"をやるように両手と両ヒザで四足立ちの格好をする。そして頭の半分欠けた可哀想な赤ちゃんを背に乗せて、廃トンネルの中へと入って行ったそうのだ。

少女に云われた通りにして小学生はベビーカーを戻しに行く。また別の誰かがベビーカーを押してくるのを楽しく待つために。

押収されたベビーカーには不審な点がいくつもあった。まずベビーカーの前部に忍ばされた針である。これには数種の幻覚剤となる薬物が検出された。ベビーカーの中へ身体を乗り出す際、ちょうど手が向かう箇所に毒針が隠されていたのだ。屋根の内側には球状の飾りが吊り下がっていた。色鮮やかな細縄を巻いたソフトボール程の大きさで、蜂の巣のように小穴の並ぶ造りをしている。飾りの中には少量の遺灰が入っており、その見た目、仕組みから地方に伝わる一種の仏具であると推測された。死んだ子供や道に迷った者が母親や仲間のもとで暮らせるようにと祈祷するお守りだったのだ。現在、この風習はなくなっている。

枕もとには紙切れが一枚、丁寧な文字が記されていた。

自殺した彼らが、どのようにしてそれを心へ留めたのかは知る術がない。

発見された遺体はどれも腐敗が進んでいて背中が異様に膨らみ、内側から破れていた。遺体の傍には山水を麓へ運ぶ溝があったが、幸いにも塞がれることなく流れていた。

．．．．．流れ降りる水は、あのバス停の排水口を出口としたのかもしれない。

近隣の老人ホームからバス停までの散歩を日課にしていた痴呆症気味の女性は、ある日を境にぴったりとその行為をやめてしまった。

『あそこね、たくさん虫がいるのよ。蜂みたいな、大きくて、人の顔が背中に、キラキラしてる。あそこ通った人の頭にくっついてくるの。水、出てるでしょ？ そこからね、やって来るの。友達が欲しいのかしら。気持ち悪いわ』

片眼が蒼く、風で紅葉色に輝く髪の少女は小学生の狂言だとしても、ベビーカーをこしらえた者がいる。

ベビーカーに置かれた紙切れからしか意図は想像できない。怪奇を丸々と肯定した上でも、そんな悪意と業がこの世界にあるとは信じたくない。

<道に迷うのは当たり前の苦痛。放棄したあげく自分で歩くのもやめて"次"を夢見る可哀想な貴方へ。お任せがお好きならワタシが与えてあげましょう。最高の輪廻、循環とリサイクル。仲間の声が聞こえたのなら導かれるがいい。ここに全てがある。黒渦に墮天するより闇に溶けるのがせいぜいの幸福だろう。これは慈悲だ>